

2 明科

明科は安曇野市の北東部に位置し、東の筑摩山地と犀川および高瀬川の河岸段丘によって形成されている。地域の約3分の2は山地で、平地は松本平の最低部に位置し、ここで犀川・穂高川・高瀬川の三川が合流する。一本となった犀川は筑北山地の中を貫流し、善光寺平で千曲川と合流している。

明科は湧水にも恵まれているが、平坦地や田畑は少ない。山に囲まれ風の影響も少ないことから、他の地域に比べて屋敷林の規模も小さくその数も限られている。

明科町はながく東筑摩郡に属していたが、平成17年（2005）の町村合併で穂高町・豊科町・堀金村・三郷村と合併し安曇野市となった。



しおがわら 2-1 塩川原 長屋門のある屋敷林

安曇野市明科七貴



塩川原の真島宅の長屋門と屋敷林

塩川原が含まれる明科七貴地区の母体は、明治8年（1875）に成立した北安曇郡の七貴村で、江戸時代の中之郷村・鵜山村・押野村（上押野・下押野）・塩川原村・荻原村・荻原新田村からなっていた。それが昭和戦後の町村合併で、東筑摩郡の中川手村・上川手村・東川手村、北安曇郡陸郷村の一部と合併して、東筑摩郡明科町をつくっていたが（このとき中之郷と鵜山地区は北安曇郡池田町に編入）、平成17年（2005）に南安曇郡の4町村と合併して安曇野市となった。したがって七貴地区は、行政上は北安曇、東筑摩、南安曇と変遷したのである。

明科七貴地区は、高瀬川の左岸と犀川の左岸に挟まれた段丘上に位置し、高瀬川と犀川が合流する岬状の丘陵を押野崎と呼び、その尾根の北方には大穴山がある。この大穴山の山麓、旧七貴村の東半から旧陸郷村の範囲に、古代から中世にかけての大穴庄があった。

五カ用水

水利に恵まれない地帯で、北安曇の農具川支流の内川から約12^{キロ}にわたり取水し、七貴地区の押野・

塩川原・荻原、陸郷地区の中村・小泉の5か村に水を引いた。この五カ用水が小泉まで完成したのは天保3年（1832）のことであった。

近世は善光寺街道や千国街道の本通りからは外れたものの、松本平と北安曇を結ぶ交通の要衝で、明治35年（1902）には犀川に犀川橋が架けられ、大正3年（1914）には高瀬川に安曇橋が架けられ、大町、穂高に乗合自動車が走った。養蚕の盛んな地域でもあった。

塩川原の屋敷林

塩川原の特徴としては、高瀬川・犀川の段丘に発達した地形であり、北面に大穴山の山地を配して南側に傾斜していることである。東西に連続した山麓の狭い耕地に集落が点在している。したがって、集落も小規模となって、北山に防風を期待しているので、安曇野のように、平坦地の中に散在する集落をそっくり包み込むような形の屋敷林は見あたらないようである。

それでも場所によっては、南からの風に対するかのように、屋敷の南側や東側に往年の樹木が残って



真島宅の長屋門を北から見る



堀内宅の長屋門



真島宅を西から見る



真島宅の長屋門の角に大きなケヤキが3本

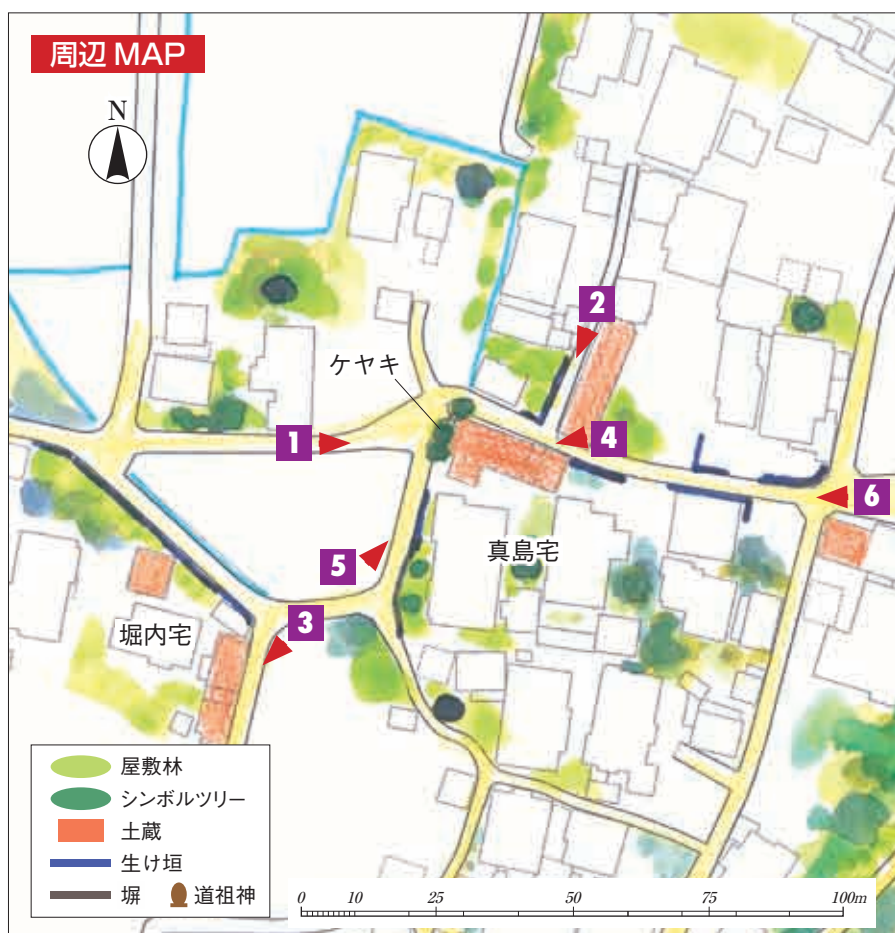
いる。また、三川合流地点の付近では南西風に対するかのように、川筋に大きいケヤキの大木が列をなして繁茂し、地区全体の防風林の体をなしている所もある。

塩川原の集落

塩川原は眼前に犀川を見下ろす眺望のよい所である。塩川原山の東麓には須恵器窯跡があり、古代の布目瓦も出土している。



緑に囲まれた小道



篠ノ井線廃線敷

旧国鉄篠ノ井線は明治35年（1902）に全通し、長野県の南北を結んで多くの人や物資を運搬してきた。昭和45年（1970）に電化されて蒸気機関車が姿を消し、昭和63年（1988）には新白坂トンネル完成にともない、旧三五山トンネルから旧第二白坂トンネル間の約4[※]が廃線となり、86年間の役目を終えた。

この区間はレンガ造のトンネルや信号所など当時の面影がよく残っている。漆久保トンネルや三五山トンネルも改修により通行できるようになり、ウォーキングコースとして整備された。沿線には3万本ともいわれるのけやき並木が続き、紅葉や新緑の時期には多くの人を訪れる人気のコースとなっている。



レンガ造の漆久保トンネル



のけやき並木の続く廃線敷